

挿絵画家アーサー・ヒューズの役割

—ジョージ・マクドナルドの『北風のうしろの国』を例に—

高橋摩利子

はじめに

19世紀のイギリスにおいて、児童文学は黄金時代を迎え、子どもたちの文学的知識が発展し読者層が広がった。また、子ども向けの本がこの時代に広く出版されるようになり、挿絵入りの本が高品質だったために非常に評判が高かった。当時の挿絵入り児童書の中で、ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-1898) の「アリス」の本におけるジョン・テニエル (John Tenniel, 1820-1914) の挿絵が最も有名であるが、ジョージ・マクドナルド (George MacDonald, 1824-1914) の多くの作品に携わったアーサー・ヒューズ (Arthur Hughes, 1832-1915) の挿絵も注目に値する。マクドナルドとヒューズは協同し合って作品にあたり、テキストと挿絵の相互作用を生み出しているからである。先行研究では、マクドナルドの作品とヒューズの挿絵の融合性については既に述べられているが、具体的な例は示されていない。

本稿の目的は、物語における挿絵の重要性を探るため、マクドナルドの長編ファンタジー作品である『北風のうしろの国』 (*At the Back of the North Wind*, 1871) のヒューズの挿絵に焦点を当て、テキストと挿絵の相互効果に着目し、物語の中でヒューズの挿絵がどのような役割を果たしているかについて考察することである。

本稿では、まず19世紀イギリスの児童文学の黄金時代を築いた理由の一つである子どもの本の識字能力について確認しながら、挿絵画家としてのヒューズについても触れたい。次に、本作品における挿絵の特徴を述べ、繊細な線で描かれる挿絵に着目し生と動の表現について考察する。最後に当時のイギリス

の下層階級社会や北風の描写について考察し、さらに、描かれていない北風のうしろの国について検討したい。この世界については、文章でも絵でも手がかりがあまりなく、読者が自分自身の中で「北風のうしろの国」を視覚化しなければならない。それは、ダイヤモンドと彼以外に北風のうしろの国を訪れた3人の内容から、想像力を視覚的に捉えることが可能であると考え。ヒューズは具現化した場面と視覚的解釈を読者に委ねるべき場面を効果的に取り入れている。上記の考察により、ヒューズの挿絵は、物語を豊かにし、テキストと挿絵の相互作用によって描かれるマクドナルドの世界に読者を惹きつける役割を果たすだけでなく、テキストに隠された部分を引き出す力も担っているということを確認にしたい。

第1章 19世紀のイギリスにおける児童書の状況

マクドナルドの作品におけるヒューズの役割について考察する前に、本章では、19世紀のイギリスにおける子どもの本の状況について確認したい。子どもの識字能力が向上したことにより、出版業界が発展し、また高品質の挿絵が登場したのである。

19世紀のイギリスでは児童文学の黄金時代と呼ばれていたが、その大きな要因の一つに子どもによる識字能力の向上が大きく関係している。

主に、子ども向けの本は中産階級以上の子どもたちに親しまれていたが、19世紀前半に、プロテスタントの活動が、貧しい子どもたちに手をのばし、日曜学校でキリスト教を伝道するようになり、その後、読み書きなどの教育も加わった。このおかげで、初等教育の恩恵に俗していない下層階級の間で識字能力が向上したのであった。下層階級の子どもたちにも、今まで中産階級以上の子どもたちが読んでいた読み物を読む機会が与えられるようになったのである。また、“*Victorian Illustrated Books*” (VIB, 1989) を参照すると、識字能力向上のための政府の助成金について以下のように述べている。

“As to literacy, the government grant for education was £20,000 in 1832. By 1876 it had grown to £1,600,000, catering for 3,000,000 children. The massive increases in population were largely at the lower end of the social scale and the education grants benefited principally the poorer classes”

「識字能力に関しては、政府の教育助成金は、1832年には2万ポンドであったが、1876年までに160万ポンドにまで増加し、300万人の子どもたちのために使われていた。人口の大幅な増加は、主に社会的規模の下限にあり、教育助成金は主に貧しい階級に恩恵をもたらした」（VIB The Background 筆者による拙訳である）。

政府の教育助成金である2万ポンドは現在にすると約136万ポンドであり、日本円に換算すると、約2億2千万円である。また、160万ポンドは現在では約1億ポンドであり、日本円では、約162億円である（*The National Archives*にて換算）。非常にイギリス政府も本に対する識字能力の向上に力を注いでいたことがわかる。

19世紀後半では、拡大する市場に安価な読み物を提供し、大衆の読書の質を向上させるために出版社が競争した時代であった。また、社会が子どもたちのニーズにより敏感になったことにも関係している。本を購入していた中産階級の子どもたちは、冒険小説、学校物語、ナンセンス、ファンタジー、おとぎ話など、様々なジャンルの本から読みたいものを選ぶことができたと言われている。さらに、児童文学の従来の読書スタイルは、状況の変化に応じていた。

識字能力が上がるにつれて、読者層が拡大し、イギリスの出版界は栄え、印刷技術の発達により発行部数が増えただけでなく価格も下がり、より広い階層が本に触れられるようになった。市場の拡大により、児童書を扱う出版社も増えたのである。このような状況において、19世紀の出版界で最も注目に値することの一つには、挿絵の並外れた品質だったと言われている。アルフレッド・クロウクウィル（Alfred Crowquill, the pseudonym of A.H. Forrester, 1804-

1872) やジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank, 1792-1878) などの画家たちが質の高い一連の作品を制作していた。その中にアーサー・ヒューズも含まれている (ハント 163)。また、絵本の挿絵においては、ウォーター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915)、ケイト・グリーンハウエイ (Kate Greenaway, 1846-1901)、ランドルフ・コールデコット (Randolph Caldecott, 1846-1886) などが挙げられる。

ヒューズは、1831年にロンドンで生まれ、1847年に彼が16歳の時に、ロイヤル・アカデミー・スクールに入学した。後にラファエル前派^{注1)}の若手画家たちに出会う。ヒューズはラファエル前派のメンバーではなかったが、彼は思想と彼らの絵画に非常に影響を受けていたと言われている。^{注2)}

マクドナルドとヒューズとの出会いは1859年であり、すぐに友人関係になったという。ヒューズがマクドナルド作品のファンタジーについて共感し、彼の挿絵は、マクドナルドの作品の一部であり、両者は絶大な信頼関係を築いていたのである。

ヒューズが、当時の主要な挿絵画家の一人として確立されたのは、アルフレッド・テニソン (Alfred Tennyson, 1st Baron Tennyson, 1809-1892) の『イーノック・アーデン』 (*Enoch Arden*, 1864) であり、予期せぬ挿絵の依頼で非常に評判が良かったと言われている。^{注3)}

彼のシンプルな線の技法と、時には驚くべき想像力が、マクドナルドの物語を完璧に補強したのである。そのため、彼は子ども向けの月刊誌 "*Good Words for the Young*" において多数の挿絵を生み出し、マクドナルドとヒューズの最高傑作である『北風のうしろの国』 (1868-70) が登場したのである。^{注4)} トマス・ヒューズ (Thomas Hughes, QC, 1822-1896) の『トム・ブラウンの学校生活』 (*Tom Brown's School Days*, 1857) やクリスティーナ・ロセッティ (Christina Georgina Rossetti, 1830-1894) の『シング・ソング童謡集』 (*Sing Song*, 1871) などの作品の挿絵を描いたが、マクドナルドの作品に多く携わっていた。ヒューズの挿絵入りの代表的なマクドナルドの作品は以下の通りである。

題名
<i>Phantastes: A Fairy Romance</i> (1858) 『ファンタステス：妖精ロマンス』
<i>The Carasoy</i> (1867) 『妖精の好きなお酒』
<i>Good Words for the Young</i> (1868-1872) (子ども向け月刊誌) (MacDonald as an editor (1870-1872))
<i>At the Back of the North Wind</i> (1871) 『北風のうしろの国』
<i>Ranald Bannerman's Boyhood</i> (1871) 『ラナルド・バナーマンの少年時代』
<i>The Princess and the Goblin</i> (1872) 『お姫さまとゴブリンの物語』
<i>The History of Gutta Percha Willie</i> (1873) 『グッタ・ペッカ・ウィリーの物語』
<i>The Princess and Curdie</i> (1883) 『カーディとお姫さまの物語』

また、ヒューズはマクドナルドの娘のリリア (Lilia Scott MacDonald, 1852-1891) の “*Babies' Classics*” (1904) や息子のグレヴィル (Greville MacDonald, 1856-1944) の『魔法のつえ』 (*The Magic Crook*, 1911)、『トリステイの旅』 (*Trystie's Quest*, 1912)、『ジャックとジル』 (*Jack and Jill*, 1913) の作品にも挿絵を描いていた (ダルビー 18)。

ヒューズは生涯を終えるまでに 700 点以上の本の挿絵を描いたと言われている (Appendix E 373)。

上記で述べたように、当時の識字能力の向上により子どもたちの読書層が下級階級へも広がっていった。また出版業界が繁栄した理由の一つには、画家たちの高品質の挿絵が登場したことがある。その一人であるアーサー・ヒューズがマクドナルドと出会い、マクドナルドの数多くの作品に携わったのである。中でも『北風のうしろの国』は最高のコラボレーションとも言われた作品であった。

第2章 『北風のうしろの国』の挿絵の特徴

本章では、『北風のうしろの国』の挿絵の特徴について述べる。多様な挿絵が描かれており、繊細な線の技法により静と動を表現しており、また挿絵が枠組みされている点にも触れていきたい。

『北風のうしろの国』は、1868年に *Good Words for the Young* に掲載され、1871年に本として出版された。

ダイヤモンドという少年と大地母神を象徴する「北風」との冒険の物語であり、いくつかの冒険と夢を通して、ダイヤモンドは様々な世界を体験する。この小説には、マクドナルドの他の作品よりもはるかに多い76枚の挿絵が付されている。*Good Words for the Young* にも掲載されていた『ラナルド・バナマンの少年時代』の挿絵は36枚、『お姫さまとゴブリンの物語』では30枚、『グッタ・ペッカ・ウィリーの物語』では9枚だったことを考えると、『北風のうしろの国』には、他の作品よりも多く挿絵が添えられていることが明らかである。空想の世界だけでなく、19世紀当時イギリスの下層階級の生活も描かれており、繊細な描写で読者を現実とファンタジーの世界へ誘っている。また、76枚の挿絵のうち、人物が描かれていない風景の挿絵は4点のみであり、人物が中心であることがわかる。ダイヤモンドのみ描かれているものが10枚、またダイヤモンドと他の登場人物が描かれているものが多い。一番多い挿絵は、ダイヤモンドと北風と一緒に描かれた挿絵でこれは12枚ある。ダイヤモンドと母親やダイヤモンドの家族が描かれている挿絵よりも多いのである。このダイヤモンドと北風は、他の登場人物と3人以上で描かれているものはなく、2人が描かれている場合には、必ず他の登場人物は含まれていない。ダイヤモンドだけが北風に会うことができるのである。ダイヤモンド一家の描写よりもダイヤモンドと北風に焦点を当てており、挿絵からも本作品が主人公と女性像の北風が中心であることが明らかである。また、人物と一緒に住居の様子やロンドンの町並みの様子が描かれており、当時の下層階級の様子が読み取れる。

木口木版画 (wood-engraving) の使用は、19世紀のイギリスにおける挿絵

の特徴である。「木を輪切りにした中央部を版木として使用する方法」(清水 59)であり、銅版画より持ちがよく、一ミリの幅に3本線が引けるぐらい細かい表現も可能だった。挿絵画家が描いた原画を彫版者が木版に彫った木版画が用いられている。*Good Words for the Young*の白黒の木版画は、ヴィクトリア朝時代の非常に優れた技術を持つ木版彫刻家(wood-engraver)のダルジール兄弟(社)(The Dalziel Brothers)によって制作されたものである(Appendix E 371)。本小説の挿絵にもDALZIELのサインが入っている。『イギリス挿絵史』で指摘されているように、「原画家と彫版画家との間には、原画と彫版について深い相互理解が成立していなければならない」のである(平田 16)。この木口木版画により、しっかりと線や白黒の対照的な色付けによって、読者に非常に力強い印象を与えている。

しかし、ヒューズは繊細な線を多用し光と影を対比させ、しなやかさが印象的な挿絵をつけている。非常に精密な細かい線刻の技法が彫版者によって効果的に再現されている。以下に3場面の例を挙げる。

【挿絵1】は、ダイヤモンドが部屋の中で姿が見えなくなった北風を探しに庭に出た場面である。風が吹いている状況の中にダイヤモンドが立っており、ダイヤモンドは静止しているが、実際に風が吹いているように見える。そよ風ではなく、非常に強い風が吹いている様子が挿絵から読み取ることができる。被写体は静であり、被写体の周りの光景が動を示しているのである。また、【挿絵2】は、嵐の場面であり、ダイヤモンドが北風の腕の中で抱かれながら嵐の中を進んでいる。北風が嵐によって船を沈めようとしている。この場面では、海は荒れ狂っており、また海が怒り狂っているように見える。さらに、本作品のエピソードの一つである「ナニーの夢」では、ナニーが病気で入院している際に月の世界を訪れる夢を見る。【挿絵3】は、ナニーが月の中から外を見ている場面である。彼女の視点から放射状に広がる月の輝きが表現されている。静止画でありながら被写体は動かないが、被写体の周囲の描写には、方向性のある動きと輝きを表現しているのである。これらの動きは、繊細な線によって実現されている。ヒューズは、白黒の挿絵を用いて光と影を非常に効果的に利

用しているのが明らかである。

また、『北風のうしろの国』における挿絵は、すべて枠で囲まれている。この枠が存在することにより、一見挿絵がテキストとは独立しているようにも見えるが、物語の一部を捉え、作者と挿絵画家の芸術的創造性を際立たせる効果がある。作品の版により挿絵の大きさやページを占める割合も異なるのだが、この白黒の挿絵は、ページ全体を占めていないことと、挿絵とテキストの間には空間を多く設けていないことからテキストと一体化しているように見える。文字と挿絵の濃淡も調和されている。さらに、ヒューズの署名がそれぞれの挿絵に刻まれていることから、細い線の枠内で絵画としての人物画または家族画にも捉えることが可能である芸術的作品と言える（【挿絵4】を参照）。

以上のように、ヒューズは非常に詳細な挿絵で物語を表現しており、色のないことで物語のトーンを投影している。また、テキストと挿絵の融合も美的に反映されている。ヒューズの挿絵の繊細な線によって、主要な被写体は静止したままであり、周囲の自然の風景に溶け込んでいるように映し出されている。また挿絵に枠があることで、芸術的要素も含まれている。

第3章 テキストと挿絵の融合性

前章では、挿絵の技術的な面における効果について述べてきたが、本章では、テキストと挿絵の融合について検討するために、主に物語の中で描かれている19世紀イギリスの児童労働の現実、北風の描写、ヒューズが描かなかった北風のうしろの国について例を挙げながら考察する。本作品の挿絵は、テキストと融合することで読者に強烈な印象を与える。モウリス・マキニス（Maurice McInnis）が述べたように、ヒューズの挿絵は、“how powerful a book could be when the text and illustrations were integrated and in concert, a harmony of words and pictures”「テキストと挿絵が統合され、言葉と絵が調和することで、本がいかに力強いものになるか」を示しているのである（Appendix E 381）。

1. 19世紀イギリスの下層階級社会

物語の中で、マクドナルドは空想の世界だけでなく、19世紀イギリスの貧困、児童労働、スラム街についても描いている。産業革命（1760-1830）の成功により、ヴィクトリア朝時代（1837-1901）は、社会的にも経済的にも全盛期を迎えた時代であった。一方で、社会階級の間には大きな格差が生じていた。その結果、多くの社会問題が生じた時代でもあった。例えば、労働者階級の子どもの多くは、孤児だったり、両親が失業していたり、収入が低かったりしたために、四つ辻掃除人、煙突掃除人、工場労働者として働かなければならなかった。

『北風のうしろの国』において、テキストでは、ダイヤモンド一家は下層階級の家族として描かれているように読み取ることができる。ダイヤモンドの父親は、物語の初めでは資産家のコールマンさんの御者として働いており、母親は専業主婦である。最初の住まいは非常に狭く、“He lived in a low room over a coach-house”「ダイヤモンドは馬小屋の2階で寝ていた」(45)。彼の寝る部屋には壁に穴が開いており、母親は風が入らないように紙を貼っていた。生活は決して楽ではなく、ダイヤモンドの靴が破れていたが、母親は彼に新しい靴を買ってあげたくても、手元にお金がなく、買うことができないため、悪天候の日は外出させないでいた。

And as Diamond's shoes were not good, and his mother had not quite saved up enough money to get him the new pair she so much wanted for him, she would not let him run out (63).

また、家具も壊れていて、いすの一つは足が3本のみ、もう一つは、背もたれが半分とれている状態だった。後に父親はロンドンで荷馬車の仕事に就くが、病気で仕事ができない時にはどのように生活をすればいいのか途方に暮れ嘆いていた。しかし、ヒューズの挿絵では、住まいの様子はテキストに描かれている通りであるが、一家の服装や振る舞い方の様子だけを参照すると中流階級に

属しているようにも見える（【挿絵 5】を参照）。また、当時の理想の家族の様子を投影しているのかもしれない。ヒューズは、彼らの生活よりも厳しい状況の中で生活しているダイヤモンドの友人のナニーに焦点を当てている。ダイヤモンド一家とナニーの挿絵を比較すると、より違いが明確である。ナニーは孤児で、ロンドンの通りで交差点道路の四つ辻掃除人として働いている（【挿絵 6】を参照）。不衛生なスラム街での生活が原因で彼女は入院せざるを得なかった。ナニーの生活状況は、当時のスラム街の様子を反映している（【挿絵 7】を参照）。ダイヤモンドがナニーの家を訪れたとき、“I should not like to live here. I don't want to go in” 「こんなところで暮らすのは嫌だな。ほく、入りたくないな」とダイヤモンドが言う。また、語り手は、彼女の不幸な生い立ちについて、“poor Nanny” 「かわいそうなナニー」（241）と言及している。ナニーは、下層階級の子どものとして描かれ、教育も奪われたキャラクターである。当時の子どもたちの悲惨な状況をヒューズの挿絵で反映している。

また、下層階級の社会に対するマクドナルドの批判について、ハントは次のように述べている。

MacDonald was extremely distressed with the quality of life that the lower class had to endure...MacDonald thought that the poor children who earned money by sweeping the streets were victims to this harsh society.

「マクドナルドは、下層階級の人々が耐えなければならなかった生活レベルに非常に心を痛めていた。...彼は、通りを掃除してお金を稼いでいた貧しい子どもたちが、この苛酷な社会の犠牲者であると考えていた」（ハント 132, 167）。

ナニーの退院後、彼女は入院前の生活には戻らず、ダイヤモンドの家族と一緒に暮らすようになり、明らかに変わった。この場面について、入院前後のナニーについて、ヒューズは非常に対称的なナニーを描いている（【挿絵 8】を

参照)。ダイヤモンドではなくナニーに焦点を当てることで、マクドナルドの懸念から悲惨な状況をより明確に示唆することができる。また、ナニーの入院前の悲惨な生活の様子を一例として解釈することができる。

2. 「北風」の描写

ヒューズが描く「北風」の女性像は、ラファエル前派的な女性像にも重ね合わせる事が可能であり、優美だけでなく、長いウェーブのかかった髪が妖艶なイメージを持っている。テキストで示されるように多様な北風の姿が描かれており、読者は挿絵からも多くの解釈を捉えることが可能である（【挿絵 9】、【挿絵 10】、【挿絵 11】を参照）。

その一方で、彼女の悪魔的な側面が、魅力的な姿によってうまく隠されている。テキストでは、悪の描写が強く、挿絵ではエレガントで美的に描かれており、このコントラストは北風の内面／外面的部分を反映している。テキストでは、内面の部分を映し出し、挿絵では外面の部分を表現しており、双方を表と裏として善と悪を効果的に構築している。

北風の存在は大きく、彼女に対して死の象徴を連想させる場面がある。物語の後半で彼女がダイヤモンドに伝えたことが、その繋がりを示唆している。

“I have to shape myself various ways to various people. But the heart of me is true. People call me by dreadful names, and think they know all about me. But they don't. Sometimes they call me Bad Fortune, sometimes Evil Chance, sometimes Ruin; and they have another name for me which they think the most dreadful of all.”

「わたしは人によっていろいろな姿にならなければならないの。だけど、私のところは、変わらないのよ。人々はわたしの事を恐ろしい名で呼ぶし、わたしについてすべて知っている気であるわ。でも彼らは何も知らないの。時には、人々は、わたしを疫病神だとか、悪運の女

神だとか、破滅だとか呼ぶわ。何よりも恐ろしいとみんなが考えている名がもう一つあってね」(289)。

北風は、「不運」「悪運」「破滅」を挙げており、いずれも負を意識させる要素である。また北風は、生と死の間の仲介者であることも示唆されている。北風がダイヤモンドに、今夜自分がしなければならぬ仕事について話をする場面がある。ダイヤモンドの父親が御者をしているコールマンさんの所有の船を沈めるといふ。“The people they say I [North Wind] drown, I only carry away to—to—to—well, the back of the North Wind—”「私が溺れさせたという人々を、北風のうしろの国に運んでいただけなの」(85)。

北風には、ダイヤモンドが知っている存在とは異なる別の側面があるようで、彼女が悪の具現化であることを示唆している。

3. 描かれていない北風のうしろの国

さらに、ヒューズは、北風のうしろの国についての挿絵はほとんど描かれていない。小説のタイトルにもなっている「その国」についての手掛かりはあまりない。ダイヤモンド以外に北風のうしろの国に行ったことのある人物は、ヘロドトス (Herodotus)、デュランテ (Durante)、キルムニー (Kilmeny) の3人である。物語の冒頭で、語り手は、ギリシャの古い作家ヘロドトスが“a people who lived there, and were so comfortable that they could not bear it any longer, and drowned themselves”「そこに住んでいて、とても快適だったので、もはや耐えられず、溺死した」と述べていたと説明している(45)。さらに、イタリアの貴族出身で偉い人(著述家)であるデュランテとスコットランドの貧しい農家の娘キルムニーの2人のキャラクターが見た世界の経験は、ダイヤモンドの見た世界と同様に、北風のうしろの国を考察する上で重要な役割を担っている。

彼らが訪れた国は、見解は様々であるが、まるで牧歌的なアルカディアのイメージを表しているかのように、魅力的で穏やかで平和な国であった。3人は

それぞれその場所でみた「川」について述べている。

ミヒヤエル・デューリング (Michael Düring) によると、“MacDonald uses water as a symbol for eternal life” 「マクドナルドは永遠の命の象徴として水を使用している」と示唆している (デューリング 14)。その水には、魅力的に映る異世界での再生の希望を反映しているのかもしれない。また、マクドナルドの死生観としての来世をほのめかしているとも解釈することができる。彼の理想化された世界は、キリスト教に対する信念、信仰、期待を表しているようであるが、あえてヒューズが挿絵によって具現化しないことで、テキストから暗示させる要素を読者に与えることにより、読者にどのような国であるのかについて解釈させている。北風のうしろの国を図示しないことで、マクドナルドが意図するヴィジョンに近づくことができ、読者にとって一つの解釈だけでなく、多様な側面からアプローチして考える力を養うことに繋がる。さらに、読者は自分の想像力を視覚的に捉えて、自身の心の中にその世界を個々に創造し構築することが可能である。

以上に述べたように、主人公の友人ナニーの挿絵を強調することにより、19世紀イギリスの当時の下層階級の生活をより浮き彫りにしている。また、ヒューズは女性像をより魅力的に描き、その一方で、彼女に隠された邪悪な顔に繋がることを可能にし、マクドナルドの創造を具現化している。さらに、北風のうしろの国についてあえて挿絵を描かないことにより、読者に多様な解釈を許した。このように、テキストと挿絵の双方はコントラストをなして、全体の意味を担っているのである。

おわりに

本稿では、マクドナルドの『北風のうしろの国』において、ヒューズの挿絵の役割について検討した。ヒューズの挿絵は、物語を豊かにし、テキストと挿絵の相互作用によって作成されるマクドナルドの世界に読者を惹きつける上で重要な役割を果たしているのである。当時の現実社会の描写について、テクス

トの内容から読み取れる部分に、さらに挿絵を添えることで、非常に大きな視覚的インパクトを読者に与えている。また、北風については多様な姿を具現化しているが、テキストと挿絵から善と悪の両面が見られる。非常に芸術的な挿絵により、ヒューズはマクドナルドと緊密に協力し、ストーリーラインを作り出している。一方、挿絵を添えていないことにより、大きな主題である北風のうしろの国とはどのような国なのかについて、読者に視覚的解釈を委ねており、読者自身の中でその世界を構築することを可能にする役割も担っている。これらのテキストと挿絵が相乗効果を発揮し、超自然的で想像力豊かな世界を生み出しておりそれぞれが支え合っているのである。

本稿は、2021年10月27日の第25回 IRSCCL (the International Research Society for Children's Literature) にて口頭発表した内容を大幅に修正および加筆したものである。

注

1. 「ラファエル前派兄弟団」(Pre-Raphaelite Brotherhood (P.R.B)) は、1848年9月に、ロイヤル・アカデミー美術学校の学生、ウィリアム・ホルマン・ハント (1827-1910)、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ (1828-1882)、ジョン・エヴァレット・ミレイ (1829-1896) を中心にジェームズ・コリンソン (1825-1881)、トーマス・ウールナー (1825-1892)、フレデリック・ジョージ・スティーブンス (1827-1907)、ウィリアム・マイケル・ロセッティ (1829-1919) の7名で結成された。「グループ命名の由来は、ラファエル (ロ) によって代表される盛期ルネサンスではなく、それ以前の十五世紀イタリア絵画およびフランドル派への賛美と憧憬にあった。」(『ラファエル前派の世界』 p.15)
2. Arthur Hughes (*Oxford Dictionary of National Biography*)
<<http://www.oxforddnb.com>>
3. 同上
4. 同上

参考文献

- MacDonald, George. *At the Back of the North Wind*. Ed. Roderick McGillis and John Pennington. London: Brandview Editions, 2011.
- 一. Appendix E: Illustrations of *At the Back of the North Wind*
- MacDonald, Greville. *George MacDonald and his Wife*. London: Johnson Reprint Corp. 1980.
- Dalby, Richard. *The Golden Age of Children's Book Illustration*. London: Michael O' Mara Books Limited. 1991.
- Düring, Michael. "Waterwheels, Healing Springs, and Baptismal Water: George MacDonald's *Gutta Percha Willie: The Working Genius*." *North Wind* 19 (2000): 9-18.
- Hunt, Peter, ed. *Children's Literature An Illustrated History*. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Muir, Percy. *Victorian Illustrated Books*. London: Portman Press, 1989.
- Ray, Gordon N. *THE ILLUSTRATOR AND THE BOOK IN ENGLAND FROM 1790 TO 1915*. London: Dover, 1991.
- THE NATIONAL ARCHIVES*. <<https://www.nationalarchives.gov.uk>> (accessed 1st October, 2022)
- Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford University Press, 2004. <<https://www.oxforddnb.com>> (accessed 1st October, 2022)
- 齊藤貴子『ラファエル前派の世界』東京書籍, 2005.
- 清水一嘉『挿絵画家の時代 ヴィクトリア朝の出版文化』大修館書店, 2001.
- 平田家就『イギリス挿絵史 活版印刷の導入から現在まで』研究社出版, 1995.

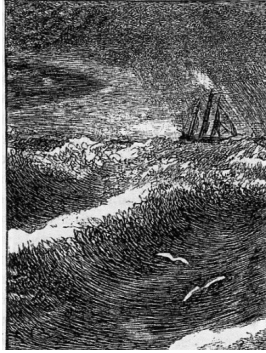
【『北風のうしろの国』における挿絵 11点】

MacDonald, George. *At the Back of the North Wind*.
(Ed. Roderick McGillis and John Pennington)

Wood-engraved vignettes



【挿絵 1】 風の場面 (p.57)



【挿絵 2】 嵐の場面 (p.96)



【挿絵 3】 月の場面 (p.247)



【挿絵 4】
枠付きの挿絵 (p.109)



【挿絵 5】
ダイヤモンドの家族 (p.214)



【挿絵 6】 ナニー (p.73)



【挿絵 7】
スラム街に住むナニー (p.185)



【挿絵 8】
退院後のナニー (左側) (p.253)



【挿絵 9】
ダイヤモンドと北風 (1) (p.69)



【挿絵 10】
ダイヤモンドと北風 (2) (p.71)



【挿絵 11】
ダイヤモンドと北風 (3) (p.288)